### INTERVIEW: インタビュー

#### ラグビー日本代表選手

# 藤田慶和去

「史上最大の番狂わせ」と内外のメディアに報じられた南アフリカ戦での逆転勝利に始まり、2015年のラグビー・ワールドカップにおける日本代表チームの活躍は、人々を熱くさせました。その日本代表チームの若きホープで、高校時代から「花園の怪物」としてスター選手の道を歩んできた藤田慶和選手に、ワールドカップの秘話を中心にうかがいました。

末筆ながら、このインタビューにご協力いただいた 早稲田大学ラグビー部出身の小塩康祐会員に感謝 いたします。

(聞き手・構成:伊藤 敬史)



#### 1 ラグビーの魅力

#### ---- どのようなきっかけでラグビーを始めたのですか。

伏見工業高校ラグビー部出身の父親の影響です。 小学校3年生の時に、野球スクールの半日体験に行け ばハンバーガーがもらえるというのに釣られて行って、 野球は楽しいなと思いました。それで、家に帰って、 父親に「明日から入部して野球をする」と言ったら、 父親は「ちょっと待ってくれ」と(笑)。

その後、父親に菅平に連れていってもらい、『スクール☆ウォーズ』のモデルになった山口良治先生に ラグビーボールで一緒に遊んでいただきました。 最終日に、ショップの前で、「ラグビーをやるなら一式買ってあげる」と言われて、ラグビーも楽しかったので、「やります」と言いました。 ラグビーを始めたのはそこからですね。

#### ―― 実際始めてみて、どんなところにラグビーの魅力を 感じましたか。

15人でやるスポーツなので仲間がいっぱいできますし、誰かが突っ込んでいけばそのサポートをしないといけなくて、誰かのために何かをするということがすごく大切なスポーツなので、そこが魅力だと感じます。

——よく「One for All, All for One」と言いますが、まさにそういう感じなのですね。

そうですね。

――藤田選手というと華麗なステップで相手をぱっとかわ していく印象が強いのですが、あれは練習して身に付けた のですか。

どちらかというと感覚で体が動いている感じです。 小学校のころ鬼ごっこが好きだったので、その影響が あるのかなと思います。

―― 東福岡高校では、1年生からレギュラーで、全国大会で3連覇したのですよね。

素晴らしい仲間に恵まれたり、いい指導者に恵まれたり、とてもいい巡り合わせで高校生活をおくれたと 思います。

#### ――早稲田大学を選んだのはどうしてですか。

小さい頃から早稲田のラグビーを見ていて、ああいう 展開ラグビーは自分のスタイルにはまるのかなと思っ て、昔からずっと早稲田に行きたい思いはありました。

――早稲田大学の4年間はどうでしたか。

結果は自分たちの目標としていたところまで到達できなかったのですが、また新しい仲間ができましたし、いろいろなことを学べて、とても自分にプラスになった4年間だと思います。

――昨年,世界の一流選手で編成されるバーバリアンズに 選出されましたが,世界の一流選手たちと一緒にやった 経験はいかがでしたか。

寄せ集めのチームで1週間に2試合というハードなスケジュールだったので、コミュニケーション能力の大切さを感じました。あと、みんな人がよかったですね。人に気を遣って、ユーモアがあって、ラグビーならではの人のよさを感じました。すごいプレーヤーは人間としてもよくならないといけないなと感じました。

#### ――世界のトップ選手たちと国を越えて意思疎通ができた 感じですか。

そうですね。オールブラックスの選手もいれば、ヨーロッパの代表の選手もいました。ラグビーは、文化とか住んできた環境が違っても1つになれる素晴らしいスポーツだというのはずっと思っていたのですが、特にバーバリアンズに行って、世界の寄せ集めのスーパースターたちが、それぞれ我も強いのですが、みんなで協力し合ってチームを作っていくのを経験して、やっぱりラグビーって素晴らしいなと思いましたね。

#### 2 日本代表として~ワールドカップ秘話

―― 18歳の時に史上最年少で日本代表に選ばれて、大学 1年になったばかりの時にUAE戦で代表デビューを飾って、 いきなり6トライをあげたのですよね。その時は、どんな お気持ちでしたか。

デビューしてうれしい気持ちもありましたが、6トライできたのは、いい仲間がいて、いいパスをくれたおかげです。そこで満足をしたわけではなくて、どちらかというとまだアジアのレベルだからという気持ちが強かったですね。

―― 代表になるといろいろな強豪国とも当たりますよね。 ラグビーは、強豪国と当たると 100 点差がつくようなこと もあって、素人目には絶対かなわないように思ってしまう のですが、代表で戦う選手はどんな気持ちで強豪国と当 たるのですか。

自分が代表に入る前はワールドカップでも強豪国に 負けていましたし、まだまだ世界は遠いと思いながら、 エディー・ジャパンに入りました。

でもエディーさんが相手の戦術を緻密に分析して、 強豪国にこうやって勝つんだという明確なビジョンを 試合前に示してくださったので、これをしっかり遂行 できれば勝てるんだという強い気持ちで臨めるように なりました。

――エディー・ジョーンズさんがヘッドコーチになってから, 日本代表はどんどん強くなっていった印象なのですが, エ ディーさんは, どんなところが優れていたのでしょうか。

エディーさんは、日本人の特性を活かしながら戦術を 組んでいて、世界のラグビーを知っている上に、日本 人のことも理解して、こうしたら勝てるんじゃないか、 それに対してこの準備が必要ということを示して、そ の準備の部分で一切妥協がありませんでした。そこが エディーさんの一番のすごさだと思います。

エディー・ジャパンは、とてもハードな練習だったと 報道されていますね。

いや,もうすごいハードでしたね(笑)。報道で出ているのは,まあ一部です。実際はもっときつかったですね。

— それでも勝つためにはこの人についていこうという感じ はあったのですか。

そうですね。ワールドカップがみんなの目標でしたし、 そこで3勝するという目標もあったので、自分たちも 練習で妥協はできなかったですし、必死に毎日ついて いっていた感じでした。

一 日本代表のメンタルコーチだった荒木香織さんが、ご著書の『ラグビー日本代表を変えた「心の鍛え方」』(講談社 + α 新書)の中で、目的を達成するためにメンタル面を上げていく重要性について書かれていました。初戦がいきなり南アフリカ戦という中で、チームとしてメンタル面を上げていくための取組みはあったのですか。

荒木さんは基本的には個人にメンタルトレーニング

をしていくのですけど、南アフリカ戦の前には、みんなの前でプレゼンをしてくれました。「緊張するのは当たり前。オールブラックスの選手も大舞台では緊張する。その緊張をどれだけ自分の中で想定をして試合に臨めるかが大切」という話をしてくれました。僕も含めて初めてワールドカップを戦う選手が多い中で、メンタルトレーニングがあの勝利に活かされたと思います。

## ―― 南アフリカ戦の前のチームの雰囲気はどんな感じでしたか。

少し緊張していましたが、でも絶対に勝つんだみたいな雰囲気はありましたね。南アフリカを倒すという、「Beat the Boks」という名前が付いた練習もありました。これだけやってきたから戦えるだろうという自信はあったと思います。

#### ――本当に勝てると思っていましたか。

ワールドカップという舞台ではテストマッチより一段 階レベルが上がると聞いていたので、あの強い南アフ リカが1段階上がったらどうなるんだろうみたいな感じ はありました。

でも、僕と一緒の部屋だった廣瀬俊朗さんが、試合前に、「みんなたぶん絶対に勝てへんと思っているけど、俺らが勝てへんと思ったら絶対に勝てへんから、今日は試合には出られないけど、絶対にあきらめずに応援しよう」と言ってくれました。それで絶対勝てるんだと思いながら試合会場に行きました。

# 一試合終了間際, 29対32で, ペナルティゴールが入れば同点になる場面で, あえてペナルティゴールを狙わずに, 勝負をかけてトライを取りに行きました。あの時のチームの雰囲気はいかがでしたか。

自分たちはベンチにいたのですけど、エディーさんから キックティーを持っていく係の人に、無線で、ショット を狙って同点にしていこうみたいな指示が来たんです ね。それでその係の人が五郎丸さんに向かって走り出 したのですが、自分たちは「おいおい、違うだろう」 と(笑)。もうベンチにいる全員が止めました。「歴史 を変えると言っていたのに、ここでトライを取らなかっ たら歴史は変わらないだろう。ここは負けてもいいから トライを取りに行こう」と。 たぶんこのベンチの選手の思いとグラウンドに出ている 選手の思いはまったく一緒だったと思います。だから 結果的にトライを取れてよかったのですけど、トライを 取れなかったとしても、あそこでショットを狙うという 選択肢は、選手の考えの中にはなかったと思いますね。

#### ―― そしてロスタイムにあの奇跡的な逆転トライで歴史的 な勝利を収めました。その時のお気持ちはいかがでしたか。

うれしいの一言ですね。試合に出られなくて少し悔 しい思いはあったのですけど、4年間、実際にワールド カップで勝てるのかわからないまま日々あれだけハード な練習をしてきて、あの勝利にはその成果が詰まって いたので、メンバー、メンバー外に関係なく、すごく うれしかったです。

#### ――藤田選手は、2勝1敗で迎えた第4戦のアメリカ戦に 先発出場しました。

それまでの3試合に出られなくて悔しい気持ちでいた のですけど、最後の1試合でチャンスをもらったので、 うれしい気持ちと絶対に何かやってやろうという気持 ちでした。

## ―― そして前半28分, モールから藤田選手が抜け出してトライをあげました。

モールは基本的にはフォワードだけでやるのですけど、押せるときはバックスも入るというチームの決まりごとがあって、その時はいい形で前に押せていたので、そのサポートをしようと思ってモールに入ったのですけど、まさか自分のところにボールが来てトライが取れるとは思っていなかったですね。

#### ―― トライを狙っていたわけではないのですか。

まったく狙っていなかったですね。いい形で真っすぐ押せていたのですけど、少し横に動き始めたので、ボールを取ってもう一度真っすぐ押せるような形をつくりたいなと思ってボールを取ったら、たまたまスルッと抜けてしまってトライできました。「あっ、トライできた」みたいな(笑)。でもトライを取った後は会場がすごく盛り上がってうれしかったですね。

--- あの試合に勝った時のお気持ちは、いかがでしたか。

## INTERVIEW: インタビュー

勝てたというのもうれしかったですが、それ以上にずっと試合に出られなかったので、試合をできる幸せを感じましたね。ジャージを着て試合に勝って、最後の試合だったので、みんなと写真を撮ったり、「ありがとう」と言ったり、そういうのは試合に出た人の特権じゃないですか。ジャージを着てグラウンドに出るというのを、一ラグビー選手として、いつも以上に幸せに感じました。

― ワールドカップでは3勝1敗で、本来ならベスト8にいけそうなところが、惜しくもいけませんでした。

ベスト8を目標にしていたので、すごく悔しかったですね。

―― それでもワールドカップで日本代表が3勝して、国内の ラグビー人気がかなり高まりました。今のラグビー人気を どう感じていますか。

自分が高校生の時は、サッカーで日本代表が勝つと 渋谷が盛り上がるみたいな感じがありました。ラグビー もいずれそうならないかなとずっと思っていましたので、 帰国していろいろな人に出迎えてもらって、少しはそこ に近づけたのかなと思いました。一スポーツ選手として、 いろいろな人に感動や勇気を与えたり、子どもたちに 夢を少しでも与えられたのはうれしかったです。

これを一過性のものにはしたくないですね。日本代表が活躍しないと盛り上がってこないと思いますが、今年はリオオリンピックという大きな舞台があるので、そこでまた応援してくれる人に感動を与えられる試合を1つでも多くしていきたいと思います。

## 3 リオオリンピック,ワールドカップ日本大会に向けて

— リオオリンピックでは、7人制ラグビーが新種目になりました。7人制ラグビーの魅力はどんなところにあるのですか。

7人制も15人制と同じフィールドで行うので,一人一人の間隔が15人制に比べて広くなります。15人制だと,人が密集してぐちゃぐちゃになるので,初めて見るとわかりにくいと感じる人が多いと思いますが,7人制だと,そういうことが少ないので,すごい,うまい,

速いというのがひと目でわかるのが魅力です。 ラグビー を初めて見る方にとっては、7人制の方が観戦しやすい と思います。

あと15人制は1試合80分なので、少し長く感じるかもしれませんが、7人制は7分ハーフで1試合14分なので、えっ、もう終わり?という感じです。

#### --- 7人制だと、やっぱりスピード感があるのですか。

スピード感はありますね。15人制よりもボールが動きますし、世界的に見ると陸上選手がオリンピックに出るために転向してきたり、アメリカではアメフトの一番足の速い選手が転向してきたりしています。それぞれの国の足の速い人がやっているので、すごく面白いと思います。

――藤田選手は高校時代から7人制の日本代表になっていますが、リオオリンピックに向けて抱負をお聞かせいただけますか。

まずは選手として出られるように、一日一日を充実させて成長していきたいと思います。オリンピックに出られたら、ただ参加するだけでは何も変わらないと思うので、メダルを取れるような練習をしっかり積んで臨みたいと思います。

―― 2019年のワールドカップ日本大会の時は、おそらく藤田選手は日本代表のエースになっていると思います。 次のワールドカップに向けて思うことはありますか。

今回は、廣瀬さんとか五郎丸さんとか、いろいろな方に引っ張ってもらって3勝できましたが、2019年には、代表に入るのは大前提として、中心として引っ張っていく立場になっていきたいと思います。エディー・ジャパンとしてワールドカップであれだけの経験をした選手は31人しかいないので、その経験を、次のジャパンにもいろいろな形で伝えていければいいなと思います。

#### プロフィール ふじた・よしかず

1993年京都府生まれ。東福岡高校、早稲田大学を経て、2016年4月からパナソニックに所属。高校時代は全国高校大会3連覇。高校3年時にはセブンズ日本代表に選出され、セブンズワールドシリーズにも出場。2012年5月、18歳7か月の史上最年少で日本代表デビュー。ラグビーワールドカップ2015(イングランド開催)には大学生ながら日本代表として参加。ポジションは、フルバック(FB)、ウィング(WTB)。184cm、90kg。